

「引く」ということ

| | |
|-----|---|
| 著者 | 安永 尚志 |
| 雑誌名 | 日本語科学 |
| 巻 | 12 |
| ページ | 3-3 |
| 発行年 | 2002-10 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1328/00002088/ |

「引く」ということ

安 永 尚 志

「引く」ということにずいぶんと関わってきたが、未だに不十分で満足できる結果を得ていない。ここでの「引く」とは文字通り「多くの中から選び出す（広辞苑）」、すなわち引き出すことを言っている。では、何をあるいは何からということになるが、もちろん字や言葉あるいは事柄などを引く。つまり、字書、辞書、事書などから引く。

日本語、文学研究においては、大漢和辞典、広辞苑、国書総目録など良い辞書類がある。しかし、これだけでは不十分で、さらに専門的な研究資料や情報が不可欠であることは言うまでもない。我々は自らこれらを組織化せざるを得ず、単に引くことから、作ることに踏み込まざるを得ない。とりわけ、データベースはそうである。10年前には研究を進めるためのデータベースはほとんど皆無であった。上述の辞書類に加えて、研究論文や文献資料の目録とそのコンテンツのデータベースが必要である。

冒頭で述べた不満足な要因の1つに、データベースの網羅性ということがある。

例えば、よくつぎのように言われる。デジタルテキストがあれば、大量の資料、情報を扱った考察が可能になり、自説の組立や確認の度合いが飛躍的に高まる。単語や語形の検索はもとより、単語が現れる環境の調査が可能になる。さらに、作品に記載されていないことの発見的検索が可能になる。言うまでもないことなので説明は割愛するが、後半の作品に記載されていないことの検索について、面白い実験がある。

万葉集には「蚊」は出てくるが「虱」や「蚤」が出てこない。奈良時代には虱や蚤がいなかった（?）。ついでに古事記で確かめると、虱はいるが蚤はいなかった（日本古典文学大系本文データベースによる）。否定事項の検索はコンピュータの活用によって可能と言っても過言ではない。特定の語彙が使われていないことや、特定の用例が無いことなどを確認することは極めて簡単である。さらに、ある作品が取り扱っていない概念の確認も可能である。しかし、このためにはこのデータベースは網羅性を保証されていなければならない。それで、残念ながら、未だに古代には虱がいなかったことを保証するに至っていない。

また、江戸期の読本の研究者が作品に出てくる「小風呂」の見当がつかない。辞書を引いても意味がつかめないのので、挿絵のある文献資料を悉皆で調べた。江戸初期の版本から、石榴風呂や引き戸のある銭湯図をできるだけ多く集めてみて、はじめて小風呂の実体を理解し得たという。これなどは、テキストから実体をつかむことはほとんど不可能な例であろう。テキストと挿絵の網羅されたデータベースが必要である。挿絵を網羅することは重要であるが、問題は絵引きのための索引づけである。絵の主題、場面、動作、状態、物体などをキーワードとすることが考えられるが、研究目的によっては求めるものが異なる。単に、物といっても、絵に出てくる名のあるものに全てキーワードを付すか、ありふれたものにまで付すかなどの選択が難しい。あるいは、普通名詞などに、例えば男、女、草木、山、川などにもキーワードを付すか、判断に迷う。

他にも、引用分析や引歌（例えば、源氏物語と古今和歌集）、マルチリンガルな全文データベースなど網羅性を要件とする話題も多いが、他の機会に譲りたい。